



- ☆指導員訪問を終えて
- ☆連尺小学校研究発表会の感想
- ☆授業のひとコマ



指導員訪問を終えて

1 指導員訪問を振り返って

本年度は小学校9校、中学校5校、計14校を訪問した。本年度は、子供同士の学び合いを取り入れた実践と、授業の中でICTを活用した実践が多く見られた。その中から、「協働的な学びを作る学習隊形」「問題解決に向けた方法の見通し」「ICTの活用」について工夫を取り入れた実践事例を取り上げ、紹介する。

「問題解決に向けた方法の見通し」をもたせる工夫

協働的な学びを意識した授業作りも大切だが、子供たちにはまずは一人で考える場を大切にしたい。しかし、問題解決の糸口を与えられなければ、考えをもつことができない子もいる。そこで、問題解決の方法の見通しを共有するための手だてが必要な場合がある。

A小学校のB教諭は、6年「分数×分数」の単元において、 $(\text{分数}) \times (\text{分数})$ の計算を、面積図を使って系統的に進めた。自作の紙芝居による場面提示によって、発展的に進めることで、子供たちはこれまでに学習したことを活用すればできそうだと見通しをもって進めていた。

2 来年度に向けて

協働学習の進め方に工夫が見られるようになってきた点はよい。しかし、自分の考えに自信をもたせるだけの活動になっているものも見られた。協働学習を通して自分の考えと友だちの考えを比べ、似ている点、違う点を見つけ、よりよいものを再構築していけるような深い学びとなるような工夫が必要である。

教科書を用いた実践が多い。しかし、一番よいものは、学級に即した実践である。教科書をベースにするのは構わないが、学校・学級の環境、学校行事、子供の生活体験を取り入れた、子供の興味を高めるような教材を開発して欲しい。

(算数・数学科指導員 畔柳英徳)

連尺小学校研究発表会の感想

6年2組の「場合を順序よく整理して」の授業を参観した。本時の授業では、起こり得る場合を数直線を用いて整理して、問題を解決していく授業であった。問題場面を把握する際には、教師が読み上げる問題に対して、端的にメモをとりながら自分なりにノートにまとめていく姿が見られた。「メモしたことを言います」と言って全員が挙手をする姿に、子供たちが積極的に授業に参加しているんだと感じた。

協議会でも話題となったのが「問題の見通し」。今回の授業では、自力解決までに20分ほどの時間が経っていた。数直線を利用するという子供の考えから、数直線をどのように用いるといいのか、どのような計算で求めればいいのか、「ここがわかりません」と答えていた子供の意見に、周りの子どもたちが意見を出し合い、あとは計算すれば求められるところまで全体で確認していた。子供たち同士の関わり合いという点で、すごいなと感じた一方、この子たちならば数直線さえ出れば、自力解決で求めることができるのではとも感じた。45分で1つの授業を完結させるという観点からも、見通し、自力解決、集団解決の1つ1つに割り当てられた時間を大切にしていかなければならないと感じた。

また、今回の研究のテーマの中に「コミュニケーション能力を思考力・実践力へ」「関わり・広げる授業」という言葉があり、授業の大半を子供たち同士が自分の考えを述べたり、数直線を用いた考え方が分からない子や計算の意味が分からない子に対して説明したり、楽に計算ができるより良い解法を見つけていく姿が見られた。その点からも、コミュニケーションの大切さだけでなく、子供同士の関わり合いによって、よりよい算数の授業が作り上げられていくのを感じた。連尺の子供たちが授業を作り上げていく姿を見て、こういう授業ができるように、取り入れられるところは取り入れてみようと感じる研究会であった。

(文責 井田小学校 岩野慎也)

授業のひとコマ

「遊んで学ぼう 九九すごろく（小学校2年生）」実践

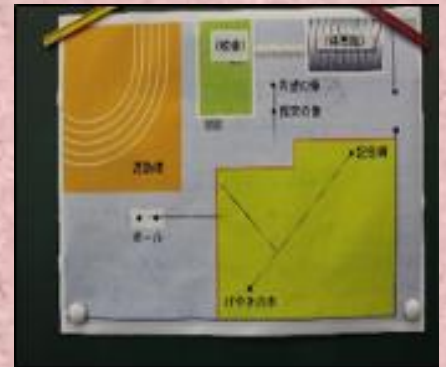
2学期に入って、子供たちが楽しみにしていた九九の学習が始まった。九九の構成やかけ算の式の意味の学習に積極的に取り組んでいた。毎日楽しそうに九九を唱え、速い子はあっという間に1から9の段まですらすらと言えるようになった。前向きだけでなく、後ろ向き、さらにシャッフルまでも簡単に唱えられるようになった。九九検定に合格するまでは、何度となく唱えていた子供たちだが、簡単に検定に合格してしまうと満足してしまったのか唱える回数が減っていった。理解が難しい子供たちは、必死に覚えようとしているがなかなか覚えられず嫌になってきている。クリアできた子も、できていない子も何とか楽しく九九の復習ができないだろうか「九九すごろく」を取り入れてみた。図工の時間を使って一人一枚の九九すごろくを作った。実践では、できるだけ多くの九九学習ができるようにと、サイコロの代わりに九九カードを使った。伏せておいた九九カードをめくり、 (2×7) の場合、「答の14の十の位の数字の数だけ進める」というルールにした。 (2×3) のように答が一桁の場合は、「おまけで1だけ進んでよい」ことにした。マス目の九九も、「 7×4 」という単体でなく、「7のどん」として、たくさんの九九が唱えられるようにした。グループになって、順番にいろいろな子のすごろくで遊んだ。どの子もすごろく遊びということもあって、楽しそうに取り組んでいた。



(文責 根石小学校 山本 友宇子)

「5章 平面図形（中学校1年生）」実践

中学生で、初めて図形を扱う単元であるため、三角定規や直定規などを使い、楽しくこの単元に入って行くことを目指した。また、生徒が主体となる学び合いを充実させるため、関わり合いの時間を多く設定した。まず、教科書P136, 137をもとにしたヒントと、図がかかれたワークシートを配り、個人追究の時間を設けた。そのあとに学級全員が作図によってタイムカプセルを探せるように話し合い活動を行った。席が近い生徒同士だけでなく、たくさんの仲間と話し合いができるように、席を離れて話し合いをしてよいことにした。級友に聞き、説明文を自力で書くことができた。説明文を書いた後に再び席を離れ、3人以上の生徒に説明する時間を設けた。最後に生徒が黒板に貼った大きな地図（資料）に作図をしながら学級全員に説明を行った。このように説明する機会をたくさん設けたことで、全員が筋道を立てて説明できるようになった。



【資料】

教師が一方的に教えるのでは、すべての生徒が理解しているかわからない。今回の実践のように、話し合いながら多くの生徒が説明をすることで説明する力が身についたのではないかと思う。

(文責 東海中学校 前原 章由)